

滋賀県大津市坂本にある天台真盛宗総本山西教寺は、明智家の菩提寺として知られていますが。

境内には、明智光秀一族の墓および熙子の墓があり、光秀との縁の深さが伺われます。二〇二〇年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」の放映に合わせ、「びわ湖大津 光秀大博覧会」と題してイベントが開催されましたが、主要会場四つのうちの二つが「西教寺」「西教寺禅明坊」となり、多くの観光客を集めました。

今回は西教寺と明智光秀をはじめとする明智一族との関わりについて、紹介します。まず西教寺の由緒について、境内にある説明板よりご紹介します。

「西教寺は、聖徳太子が、仏法の師である慧慈・慧聰のために開創された寺で、推古天皇の二十六年（六一八）に大窪山の号をたまり、天智天皇の八年（六六九）に西教寺の号を下賜されたと伝えられている。

寺記には天台座主慈恵大師良源大僧正・恵心僧都が念佛道場とした。その後、比叡山で修業された真盛上人が文明十八年（一四八六）入寺し、不断念佛の根本道場として、西教寺を再興させた。・・・以下、省略」

真盛は嘉吉三年（一四四三）、伊勢国一志郡に生まれ、十九才の時に比叡山に登り、二十年修行した後、山を下り、西教寺に入りました。諸人の信仰を集め、宮中や幕府にもその影響を与えていきます。交流のあった人々としては、後土御門天皇・後柏原天皇・三条西実隆・近衛政家・足利義政・日野富子など、錚々たる面々が名を連ねます。

西教寺の興隆は真盛没後も続いていきますが、それが一夜にして灰燼に帰したのが、元龜二年（一五七一）九月十二日の織田信長による比叡山焼き討ちです。

比叡山麓にある西教寺は、織田軍により日吉社や坂本の町とともに焼かれます。再興は、延暦寺・日吉社より早く、天正二年（一五七四）に本堂が再建されたことが棟札よりわかります。

しかし、これより前に、復興の手を差し伸べたのが、明智光秀です。元龜四年（一五七三）五月二十四日、明智光秀は今堅田の合戦での戦死者十八人を弔うため、西教寺に供養米を寄進しています。（※1）

光秀は比叡山焼討後に信長より近江滋賀郡を任せ、坂本城を拠点としていました。元龜四年（一五七三）二月二十九日、足利義昭に与した堅田の反織田派と戦った今堅田の戦死者の供養を、当時本堂もなく、反信長派と思われるも仕方のない西教寺に依頼したのです。領地坂本の復興にも配慮したのではないかと思えます。

なおこの書状で光秀は、「咲庵 光秀」と署名しています。「咲庵」は光秀の雅号と思わ

れますが、「咲庵」と署名した文書はこれ以外見つかっていません。

次に西教寺と明智光秀が関わりを持つのは、天正四年（一五七六）です。この年、光秀は大病を患い、五月から九月にかけて、坂本城にて治療・静養します。

『兼見卿記 第一』 天正四年

「五月二十三日条 惟日以外依所勞歸陣、在京也、罷向、道三療治云々

五月二十四日条 惟日断念之事自女房衆申来、撫物以下之事以一書返答

五月二十六日条 ・・・・、入夜自惟日女房衆、以大中寺祈念之事申来、為惟日御見廻

自左大将殿隼原御使云々

七月十四日条 ・・・・、惟任日向守為見廻下向坂本、帷一端越後、持参、面会、」

大坂の戦陣にあつた光秀が病を發し、京に戻り、曲直瀬道三が治療にあたっており、光秀室が病氣快癒の祈念を吉田兼見に依頼しています。その後光秀は坂本に帰り、七月に兼見は坂本に見舞いに訪れています。

ところが、今度は光秀室が病に倒れます。

「十月十日条 惟日女房衆所勞也、祈念之事申来、祓・守令持参見廻了

十月二十四日条 惟日女房衆所勞驗氣也、先日祈念祝着之由、以非在軒折幣銀子一枚

到来、

十月二十七日条 惟日在京也、罷向、

十一月二日条 ・・・・、惟日女房衆所勞見廻罷向、惟日面会、」

この頃、光秀室は京にいたようです。夫婦が互いを思い合う厚情が感じられます。十一月十四日にいったん快癒したように見えた光秀室の病でしたが、再び所勞に倒れています。

このあと、『兼見卿記』の記事には見えなくなりますが、西教寺に伝わる文書に、十一月七日、逝去の記事が見えます。

『戒光山西教律寺記』

四年丙子光秀公之令室逝 十一月七日法名□福月真祐大姉

光秀室の没年については、『明智軍記』では坂本落城時、としています。もとより軍記ものであり、信頼できるものではありません。『兼見卿記』の流れから見て、天正四年十一月七日が史実と思われる。

二〇二〇年に聖聚来迎寺で見つかった「仏涅槃図」の裏面寄進銘の名かに光秀室の法名が見つかりました。この「仏涅槃図」は天正九年八月のものであり、それ以前に光秀室が亡

くなっている傍証といえます。

光秀室は西教寺に葬られました。現在も墓碑が残されています。墓碑には「為福月真祐大姉 十一月七日」とあります。

このほかにも明智光秀と西教寺は、関係を深めていったようで、西教寺塔頭実成坊の過去帳に以下の記載があります。（西教寺の説明板より）

「天正二年五月十五日 梅岩廣秀禅定門（濃州明智三郎四郎）
天正三年六月十八日 圓光宗梅禅定門（明智殿幕下）
天正七年二月十日 宗普法師
天正七年十一月十二日 盛賢禅定門（濃州妻木）
天正七年十一月十二日 盛巖禅定門
天正十年六月十四日 秀岳宗光大禅定門（明智十兵衛尉殿日向守光秀）
天正十年六月十八日 一友宗心居士（濃州明智藤右衛門）」

天正十年六月、本能寺の変後、山崎の合戦で敗れ、明智光秀が敗死すると、坂本城は秀吉方の堀秀政に攻められ、六月十五日に落城しました。

その後、六月十八日に明智藤右衛門が西教寺にて自害しています。藤右衛門は妻木広忠といい、光秀室の叔父とされています。藤右衛門は西教寺に光秀一族の菩提供養を依頼した上で、自害したと伝えられています。

また、説明板には記載されていませんが、気になる人物として、

長翁貞寿大姉 明智惟任日向守御妹

があげられます（『実成坊過去帳』）。この女性が信長の側室であり、信長と光秀のパイプ役として注目されている「御妻木殿」ではないか、という説があります。天正九年八月六日頃に亡くなっています。前述した聖聚来迎寺の「仏涅槃図」も天正九年八月であり、「御妻木殿」死去に際して、寄進された可能性が指摘されています。

明智一族ゆかりの寺、西教寺。

興味のある方は、一度訪れてみてはいかがでしょうか。

※1 明智光秀寄進状（藤田達生・福島克彦編『明智光秀 史料で読む戦国史』明智光秀文書集成 三一号文書）

【参考文献】

中島眞瑞 「明智光秀の365日」(『別冊歴史読本 完全検証 信長襲殺』(新人物往来社、一九九四年)

永田恭教 「光秀をめぐる知られざる女性たちとは？」(洋泉社編集部編「ここまでわかった本能寺の変と明智光秀」洋泉社、二〇一六年)

大津市歴史博物館 「聖聚来迎寺所蔵「仏涅槃図」裏面寄進銘について」(『明智光秀と戦国時代の天津』大津市歴史博物館、二〇二〇年)